

「一日は千年、千年は一日」

2019年07月15日

ペトロの手紙 二 3章8節～13節 愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。

「著者」は、「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい」と訴え、それは、「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです」という言葉であると言う。この言葉は詩編 90 編 4 節の「千年といえども御目には／昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません」から導かれた言葉であろう。神の働きは人間の時間感覚では測れないと言っている。神の永遠は今に現われ、今は神の永遠を映している。ある人々は、主が約束された終末が遅延していると考えているようだが、神は約束の実現を遅らせているのではない。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めて、救われるように神が忍耐して、猶予の時を与えているのである。ヘブライ書 10 章 37 節には、「もう少しすると、来るべき方がおいでになる。遅れられることはない」と、約束は必ず実現すると書いている。また、パウロはローマ書 11 章 32 節で、「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです」と、神は憐れみをもって、忍耐して、悔い改めを待っておられると、Ⅱペトロの著者と同じことを書いている。

「主の日は、盗人のようにやって来ます」と、突然終わりの日が来ると言う。主イエスは「このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである（マタイ 24 : 43）」と語っておられる。その日には「天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます」と、天は焼け崩れ、全てが燃え尽き、溶け去る。地上の全ては暴かれ、滅び去るのだから、聖なる信仰深い生活を送り、滅びから救われなければならない。あなたがたは、この「神の日」が来るのを待ち望み、その到来が早まるように、信仰を正すべきであると勧める。

今日、天変地異による主イエスの来臨を信じる人はいない、また、そのように信じる必要もない。聖書は神話的に表現しているのである。しかし、神が天地を創造された初めがあるのだから、当然、決着をつける終わりがある。キリスト教信仰は、この終わりの日を待ち望み、今を生きるのである。終末信仰は、古代人の神話で、信じるに足りないと言う人もいるが、私は終わりの日、全く贖われる日を信じている。この日を信じるから、今がどんなに破れていようとも、なお、樂觀をもって希望に生きられるのである。